

## 〔講演要旨〕

## 疎植栽培がコシヒカリの生育および収量に及ぼす影響

中山幸則・北野順一・大西順平  
(三重県農業研究所)

三重県では稲作経営規模が拡大する中、育苗期から移植期の労力軽減、コスト低減のため疎植栽培に取り組む農家が増加している。また、近年の温暖化は水稻の生育を旺盛にし、疎植栽培においても茎数確保が容易になっていると推察される。一方、県の主要品種であるコシヒカリを疎植栽培した場合の収量および品質への影響について具体的に示したデータは少ないことから、栽植密度試験を行い、収量および品質への影響を検討した。

試験は2006年から2008年にかけて三重県松阪市にある農業研究所内圃場（細粒灰色低地土）で行った。コシヒカリを供試し、栽植密度は7.4, 8.9, 11.1, 14.8 および22.2 株/㎡（条間30cm）の5水準とした（2008年は7.4 株/㎡を実施せず）。移植時期は4月21～24日で、稚苗を株当たり4本手植した。基肥は塩安系肥料（N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=12:18:14）を窒素成分で0.2kg/a全層施用し、穂肥は塩安系肥料（N:K<sub>2</sub>O=17:17）を窒素成分で0.2kg/aと0.1kg/a分施した。中干は6月上旬に10

日間程度実施したが、2006年は行わなかった。

栽植密度が低いほど面積当たりの茎数は少なく推移し、有効茎歩合は高まるが、穂数はやや少なくなった。葉色は移植後40日以降～登熟期にかけて、栽植密度が低いほど濃く推移した。出穂期および成熟期は栽植密度が低いほどやや遅くなった。稈長は栽植密度が低いほどやや長くなるが、倒伏程度は逆に小さくなった。栽植密度が低いほど地表部の光量子量は多く推移することから、雑草防除の面から、疎植化すると要防除期間がやや長くなると考えられた。栽植密度が低いほど単位面積当たり穂数はやや少なくなったが、収量への影響は小さかった。玄米外観品質や玄米蛋白質含有率への影響は小さかった。

以上、7.4～22.2 株/㎡の範囲で収量、玄米外観品質および玄米蛋白質含有率への影響は小さいと考えられたが、生育経過は大きく異なるため、今後、栽植密度別の生育指標を策定したい。

〔発表：第139回講演要旨〕

## 〔講演要旨〕

## 酒造好適米「神の穂」の育成と栽培法

山川智大・村上高敏・宮本啓一・橋爪不二夫・松井未来生・神田幸英  
(三重県農業研究所)

三重県で栽培されている酒米品種は大吟醸酒の原料米となる「山田錦」がほぼ100%を占めており、純米酒用の酒米品種の作付けは県内ではほとんどなかった。そのため県内の酒造メーカーからは純米酒向け品種の育成要望が以前から強かった。そこで早生で栽培適性、酒造適性に優れる酒米品種の育成を目標に、1996年に「越南165号」と「中部酒97号（後の夢山水）」との交配を行い、2007年にその後代から育成された品種が「神の穂」である。同年10月に種苗登録の申請を行い、翌2008年の7月に三重県の奨励（認定）品種として採用された。

この品種は、出穂期、成熟期ともにコシヒカリとほぼ

同じ早生種であり、酒米としては収量性に優れている。また精米時の碎米率が低く、精米適性に優れており、製成酒は味にふくらみがあり優しい酒質となる、といった特性がある。2007年度は県内12の酒造メーカーで試験醸造を行い、いずれも高評価を得ている。

また「神の穂」の栽培試験を行った結果、移植時期は4月下旬から5月上旬、施肥量は基肥として窒素で0.4～0.5kg/a、追肥として出穂20日前に窒素で0.3kg/a程度施用し、出穂後35日前後に収穫することで、高品質な生産物が得られることが明らかとなった。

〔発表：第139回講演会〕